

最優秀賞

【総合的な学習】

「社会に開かれた教育課程」の実現を 「総合的な学習の時間」から

熊本市立日吉東小学校

た や ま ま さ ひ ろ

田山 雅博



1 研究主題について 【何ができるようになるか】

これからの未来を生きる子どもたちには、刻々と変化する社会環境の中で、他者と協働しながら自ら考え、判断し、適切に対応し、よりよい生活を築いていける子どもたちになってほしい。そのために、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習改善を求めるのは必至である。本研究では、6年生の総合的な学習の時間を中心として、「熊本地震復興数え歌をつくろう」という単元を進めていった。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を、まずは「総合的な学習の時間」で目指し、本研究主題を設定することとした。

2 副題「熊本地震復興数え歌」づくりへの思い～「はじめに」に代えて～【何を学ぶか】

本研究は、平成29年度日吉東小6年生の総合的な学習の時間「熊本地震復興数え歌をつくろう」の実践をまとめたものである。彼らが6年生となった平成29年4月は、熊本地震から1年が経ったときであった。児童は、熊本城をはじめ、復興が道半ばのところがあること、またそのときもなお仮設住宅に住んでおられる人たちが

がいらっしゃることなども知っていた。そして、地震当時は本学年の児童も含めて、本校では数百人の方々が避難生活をされていた。それにもかかわらず、すでに児童の周りでは、熊本地震のことが話題にのぼることはなく、記憶の風化が感じられた。

学校における避難所が閉じられ、少しずつ復興が進む状況下で、熊本地震について児童がもてる力を出して、主体的な学びをどのように構築していったらよいのか、と悩み模索しながら、4月に学びのスタートを切った。

そのような中で出会ったのが、年度当初熊本日日新聞に掲載されていたある記事であった。

『「数え歌」で震災伝承』という見出しのそれは、明治22年の熊本大地震の際、当時の様子が数え歌にされた資料を、熊本県立大学大島准教授が発見されたという記事であった。民衆が災害を伝え、記憶する手法として数え歌が用いられていた事実を知り、6年生児童にこの記事を紹介したことから、この研究はスタートした。大島准教授が発見されたその数え歌の歌詞には、東北なまりの表現が見られ、災害を語る数え歌が、東日本大震災で被害の大きかった東北地方にまで広がっていたことに運命的なことを感じた6年生児童に、「私たちが、平成の熊本地震を伝える数え歌をつくりたい」との思いが生じたのである。

本研究は、熊本地震の数え歌をつくることを

通して、平成の熊本地震のことを後世に伝え、記憶を風化させないための歴史・文化の継承者（未来の創り手）として、社会参加・社会貢献する児童を育てることをねらいとした。この研究・単元では、熊本地震のことを振り返り、「未来に向けて、熊本地震の記憶をつながていきたい」との児童の思いを大切にしたい。そして、この学びで完結することなく、今後の児童の人生で、突然に起こるかもしれない災害時に生きるものとして。今回の地震によって、明治の熊本地震のことを、ほとんどの熊本県民が知らなかったことが報道等でも明らかになったが、児童の創作した数え歌を広く公開していくことで、平成の熊本地震が決して風化することなく、今後の大地震の際に生きる一助ともなるよう、研究を進めることとした。

3 研究の内容 【どのように学ぶか】

(1) 研究の仮説

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業に、「学校外の社会との連携・協働」を重ねて「総合的な学習の時間」の授業を構築していくことで、「社会に開かれた教育課程」が実現するのではないか。

(2) 研究の中心

- ① 主体的な学びとなる工夫
- ② 対話的な学びとなる工夫
- ③ 深い学びとなる工夫
- ④ 学校外の社会との連携・協働の工夫

(3) 研究の具体的方策

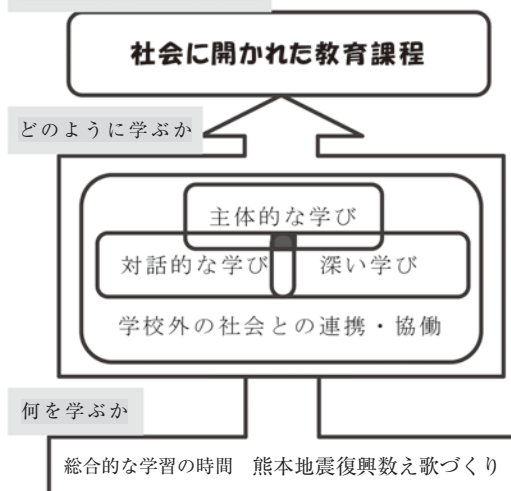
- ① 主体的な学びとなる工夫について
 - ア 児童の学びの意欲を高める出会い
 - イ 学びが見え、継続できる評価
- ② 対話的な学びとなる工夫について
 - ア 外部の人材、先哲の考え方の活用
 - イ 児童の対話の積極的な促し
- ③ 深い学びとなる工夫について
 - ア 思考ツールの効果的な活用

イ 他教科の学びの活用

④ 学校外の社会との連携・協働の工夫について

- ア 「熊本地震復興数え歌」発表会の設定
- イ メディアや外部人材の効果的な活用

何ができるようになるか



図A 1、2、3をまとめた研究の構想図

4 研究の実際

まずは、**熊本地震のことを振り返る活動**（①：9時間扱い、主に4・5月）からスタートした。本校は、昨年度までNIEの指定を受けていたこともあり、多くの新聞等を用いて熊本地震のことを振り返っていった。熊本地震のことを、自身の記憶や新聞、家族への聞き取りなどを通して振り返らせ、忘れてはいけないことを出す活動を通して、まずは、6年生児童の一人一人が意見をもてるようにしていった（写真A⑧）。



写真A 新聞を用いて振り返る様子



写真⑧ 授業の板書の様子

次に、「数え歌について学ぶ活動」(②:11時間扱い、主に6・7月)に移行した。熊本日日新聞(以下、熊日で表記)の記事(写真⑨)を紹介し、明治の熊本大地震の際に、当時の様子が数え歌にされていた事実と出合わせ、それが東日本大震災の被災地である東北地方にまで伝わっていたことを知らせ、「私たちも平成の熊本地震を伝える数え歌をつくり、伝えていきたい」という単元を貫く意欲を喚起した。児童の声を以下に示す。

- C 明治時代にも、大きな地震があったんだ。
- C そのときも熊本城が大きく壊れていたんだ。
- C 大島先生の話ぜひ聞いてみたい。そして私たちも数え歌をつくりたい。先生、何とかお願いします。
- C もし私たちがつくったら、避難所の経験も数え歌で知らせたいな。
- C テレビに取材してもらったらいいんじゃない？



写真⑨ 熊本日日新聞
平成29年5月23日付

数え歌自体を知らない児童も多かったので、その後、資料等を用いて、数え歌の簡単な仕組みを知らせていった。

この学びのことを熊日の記者の方に伝え、大きな関心を示していただき、1年間継続しての取材と、また数え歌が完成した折に、それを発表する際は新聞記事にするという内諾をいただき、この段階では児童にはそのことを伝えず、学習を進めていった。その後、児童の思いを実現するため、熊本県立大学大島准教授にアポイントを取り、学校としての理念を共有いただいた後、ゲストティーチャーとしてお招きし、授業をしていただいた(写真⑩⑪)。



写真⑩ 明治の熊本地震の際につくられた数え歌



写真⑪ 大島先生の授業の様子

その授業中にご指導いただいた明治の熊本地震の数え歌の特徴(○)と数え歌づくりへのアドバイス(◎)を以下に示す。

- 345のリズムで美しい
- 歌って覚えやすい
- 例が多い

- 5番に東北の方言 東北まで伝わっている
- 歌は記憶である
- 歌がいちばん伝わるメディアだった
- 20番までつくるのが基本
- ◎親近感、恐怖、リアリティを増すため熊本弁を入れたほうがよい
- ◎恐怖だけ、起こったことだけではなく、みんなのがんばり、将来への希望、助け合ったこと、何が必要か、どうやって乗り越えたか、みんなに歌ってもらえるような数え歌づくりを……

この授業後の、児童の声を以下に示す。

- C この数え歌は、東日本大震災のあった東北にまで伝わっていたんだ。何だか今回の熊本地震と東日本大震災の運命を感じるね。
- C 平成の熊本地震の数え歌をつくる気持ちが高まってきました！
- C 先生、そしてこれを発表し、みんなに知らせましょう。

この学びの終了後、熊日からの取材の件を児童に伝え、この学びのゴールとして発表会そして公開にまでつなぐことで、「未来に向けて、熊本地震の記憶をつながていきたい」との児童の願いをかなえるため、学びへの意欲をさらに喚起した。大島准教授からご指導いただいたことをもとに、場所、日時、被害、体感、恐怖、状況、必要だと思ったこと、明るい未来に向かっての展望の8観点をベースに数え歌をつくっていくこととした。

その後、**数え歌をつくる活動**（③：12時間扱い、主に11・12月）に移行した。数え歌をつくる際、児童から出た声を以下に示す。

- C その説明だと、あのときの怖かったことが伝わらないよ。
- C 熊本弁に代えたほうが絶対いいよ。でも、頭文字を揃えるのが難しいね。

- C 地震が起きたときだけでなく、学校が再開したときのことも入れよう。
- C ブルーインパルス(復興応援のイベント)のことも入れようよ。
- C あのライオンが逃げ出したというネット上のデマのことも伝えたほうがいいね。
- C なかなか345のリズムに合わせられない。ぴったり来る言葉はないかな？

数え歌をつくる活動の中で、児童はアイデアの重なりや誤った内容がないかを、当時の新聞記事等を通して確認し、情報を精査しながら確かめていった。定型の踏襲、児童の思いが含まれているかもあらためて考えた（写真⑤）。頭文字（例「1」→「い」「ひ」から始まる等）を揃えるため、なかなかつくり出せなかった「6」のところを、児童全員で国語辞典を用いて言葉探しを行い、「ろ：老若男女」という、その数え歌にふさわしい言葉を見つけたときは、児童全員で喜び合った。

数え歌が仮完成した際には、熊日の記者の方から、新聞記者としての視点で、数え歌がより伝わりやすいものとなるためのアドバイスを受けた（写真⑥）。アドバイスを基に、さらに一つ一つの言葉にこだわって数え歌を吟味し、児童は自分たちで言葉を紡いでいった。児童から聞かれた言葉を、以下に示す。

- C 熊日の〇〇さんからいただいたアドバイスのように、日吉東という地域性と小学生らしさをもっと出したほうがいいな。よし、その点を修正していこう。もっとよい言葉を探していこう。

そして、**数え歌公開の準備をする活動**（④：10時間扱い、主に1・2月）に移行した。つくりあげた数え歌を、どのような方法で、在校生、地域、保護者、近隣校を対象とした公開を行うのかの話し合いを、思考ツールの「座標軸」を用いて行った（写真⑦、図⑧）。



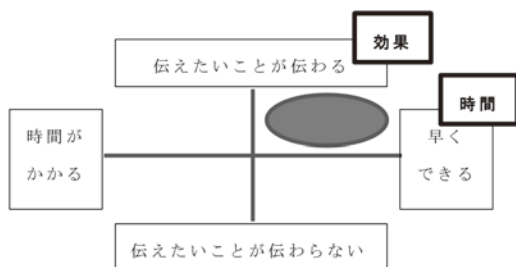
写真F 数え歌をつくり、みんなで相談する様子



写真G 熊日記者の方からのアドバイスの様子



写真H 保護者対象の公開を考えたときの板書



図B 座標軸の構成

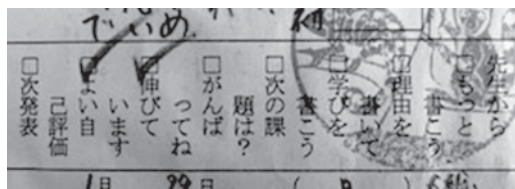
児童から出たアイデアを比較分類するための座標軸であったが、各班で協力して作成した分類を、プレゼン形式で発表し、公開の方法を児童全員で検討していった。効果と時間の観点でアイデアを比較した。

このような学びの中で、児童は毎時間、自己の学習活動を振り返る自己評価を行った（写真①）。評価シートを一覧できるようにして、前

時までの内容が次時につながり、自己の変容にも気づくことができた。教師の評価も継続しやすいよう、☒とスタンプで評価が容易にできるようにした（写真①）。



写真① 振り返りを書く児童の様子



写真① 評価シート 教師のチェック欄



写真① 上からラミネート作成、発表会の案内作成、プレゼン作成、発表練習の様子

最後に、**発表会に向けての活動**（⑤：8時間扱い、主に2・3月）に移行した。④の活動で検討した方法で、数え歌配布のためのラミネート作成、発表会の案内作成、プレゼン作成、そして発表練習等と、児童は主体的に、分担・協働して活動し、いろいろな工夫をしながら発表会までの準備を行っていった（写真㉔）。

そして3月、保護者、地域の方、そしてご指導いただいた熊本県立大学大島准教授他100名以上のお客様をお招きしての発表会を実施した（写真㉕）。

参観いただいた大島准教授が、ご自身のブログにアップされた言葉を以下に示す。

～熊本地震を題材として作成した「復興数え歌」の発表会だったのです。作品は素晴らしく、とても6年生が作ったものとは思えません。～あまりの出来栄に驚愕していると、今度は発表の演出に感激が止まりませんでした。～伝えなかったのはこういう事です。

「皆さんは後世に残る素晴らしい作品を創り上げました。心から感激しました。あつてはならない事だけど、まだどこかで大地震があった時、きっとこの歌に助けられる人がいると思います。私は阪神・淡路大震災を経験した時、なす術がなく無力感と絶望に苛まれ、その気持ちを引きずったまま今日に至っていますが、こうして皆さんのお役に立てる働きができたことで、過去の震災を乗り越えることができたような気がします。指導に対して大きな感謝をいただいたけど、このような機会をいただけたことに私の方が感謝しています。本当にありがとう。」

（ブローグー歴史学者の、いわば抵抗の記録―2018.3.8より 抜粋）

また、毎日発行していた学級通信で、今回の学びについても発信していたところ、それを見た保護者の計らいでTSUTAYA書店でも作成した数え歌を掲示していただくことができた



写真㉕ 発表会の様子



写真㉖ TSUTAYA書店で数え歌を掲示していただいている様子

（写真㉖）。その他にも、地域、保護者、近隣校にも配布し、いろいろなところに掲示していただいた。

児童は、3月末に無事卒業をしたが、その後のことを以下に示す。前震から2年の平成30年4月14日、熊日に「熊本地震復興数え歌」づくりにおける、1年間の児童の学びの様子を掲載いただき（写真㉗）、児童（生徒）はあらためて学びのことを実感していた。熊本地震から2年の特集号での掲載で、紙面の半分のスペースを使って大きく掲載していただいた。その紙面には、QRコードから数え歌を読むことが可能となる工夫をつけていただいたことで、他方面へ数え歌が広がることも容易となった。



写真㉗ 熊本日新聞平成30年4月14日付



写真① 熊本日日新聞平成30年5月26日付

5月26日には同じく熊日の「読者の広場」というコーナーに、上の記事を見た県内の一般の方から投稿もいただいた（写真①）。大変ありがたいコメントをいただいた。

5 研究の成果と課題（○：成果、●：課題と方策）

(1) 児童のアンケートから（アンケート66人中）

数え歌づくりの学びの中で、

- | | |
|-----------------------------|------------|
| ① 興味をもって取り組んだか。 | |
| 「はい」の割合（人） | 100% （66人） |
| ② 課題や悩みを自分の頑張りや友達の協力で解決したか。 | 100% （66人） |
| ③ 自分の思いや考えをよりよく表現したか。 | 88% （58人） |
| ④ 学びを生活に生かしたか。 | 82% （54人） |

(2) 児童感想

- 実際に数え歌をつくって、熊本弁に直すとき、私たちだけでは考えられず、先生や友達に聞いて解決できました。他にもみんなや大島先生、熊日の○さんからいろいろなアドバイスを受けてとってもよい数え歌ができました。保護者や地域の方にどんな感じで伝えたら伝わりやすいかななどをクラスの人と討論して解決しました。
- この数え歌を全国に広め、風化することなく、自分たちの思いをみんなに知ってもらいたいと思います。一文字一文字じっくり考えてつくった熊本地震復興数え歌、このつくった努力をいろんなことにつなげていきたいと思います。
- 父や母がいなくなってから、または自分の子どもがいるときに大地震が起きたときも数え歌を思い出し、冷静に判断できるように思い数え歌をつくりました。この願いがかなうことを願っています。

(3) 研究主題との関わりについて

- 授業前、授業中、そして授業後も、学校外の社会と連携・協働を効果的に図ることで、学びが深まり、広がり、本校の6年生の「総合的な学習の時間」が「社会に開かれた教育課程」の実現へとつながっていった。

(4) 研究の中心①④（主体的な学び、学校外の社会との連携・協働）について

- ゲストティーチャーやメディアの活用を図りながら、明治の熊本地震の数え歌と印象的に出合わせ、発表会と新聞紙面でそれを公開するという、児童にとって魅力あるゴールを設定することで、主体的な学びの展開が可能となった。児童アンケートからもわかるように、年間を通

して児童の意欲は抜群であった。

- 児童の毎時間の振り返りに、教師がアドバイスを行うことで、児童は学びの中で自分のよさやがんばり、課題をつかみ、さらに主体的に他者と協働して学習にのぞむことができるようになった。教師からの変容や成長を促す声かけなども行いやすく、継続した評価が可能となった。

- 「熊本地震をつなげる」との思いが実現し、児童は大きな成就感を味わっていたが、「未来の創り手」と成長するよう今後も声かけを続けたい。

(5) 研究の中心②④（対話的な学び、学校外の社会との連携・協働）について

- 児童同士の協働、地域の人たちとの対話、先哲の考え方（明治の数え歌）を手掛かりに考え、自己の考えを広げ、深め、「熊本地震復興数え歌」としてまとめていく「対話的な学び」がいろいろな場で実現できた。

- 未来の創り手として学びを長期的に生かすことだけでなく、対話をさらに充実させ、短期的にも生かす工夫も並行して行う必要がある。

(6) 研究の中心③（深い学び）について

- 児童は座標軸を使いこなし、自分たちの考えを明確にしていた。それを基に、よりよいアイデアを協力しながら出していくことができた。

- 児童の発言や考えの多くに、他教科での学びを生かしたものが多くあった。特に、国語や社会の学びを生かして、課題を解決する姿が見られた。

- 学習内容においては、座標軸でない他の思考ツールを利用したほうがよい場面も考えられた。場面に応じた思考ツールのさらなる活用の在り方を考えていく必要がある。

6 創りあげた「熊本地震復興数え歌」～「おわりに」に代えて～

以下に、児童が言葉を紡ぎ、一所懸命に取り組み、創りあげた「熊本地震復興数え歌」を示す。下のものを、B4サイズにラミネート化し、地域、家庭、近隣校等に配布し、掲示していただいている（写真⑨）。児童は、歴史・文化の継承者として、未来の創り手として、今後も社会参加・社会貢献していくであろう。

熊本地震 復興数え歌

一 石垣瓦天守閣 熊本城は崩れ落ち
最後に残った石一つ
二 豚汁カレーうどん
まうごうれしが食料と
三 全国的な復興が 僕らの熊本スローガン
創造的な復興が 僕らの熊本スローガン
四 熊本城も負けるばい
夜に発生真の闇 平成二十八年の
四月十四・十六日
五 国府高校いす並べ SOSを伝えたい
ネットで広がりまうごう支援
六 老若男女のボランティア 心強い助かった
次は私が恩返し
七 電気が通たら何もできん
止まるといかにライフライン
八 はね起きるほどの強い揺れ みんな急いで公園へ
九 余震たびたび二千回 全壊半壊液状化
地割れに亀裂に土砂崩れ
十 鳥肌全身立ちまくり
たなうたおれ氣のついた
自分ば自分で守らん
十一 今も体が覚える
地震でもなかなれええも
十二 二週間の休み明け
学校スタートうれしかつばうてん
十三 余震でドキドキ止まらんばい
みんなバツク大変ばい
十四 水やガスが出らんばい 暗闇の中うすくまる
余震がきたらすぐぐもぐる
十五 揺れる感じを思い出す 今も余震が続いてる
腰の痛かしむくむ 気持ちん悪か車中泊
十六 広かところで寝よこたる
ライオン脱走イオン火事
十七 未来人はおらんばい
デマに負けんぞ肥後もこす
十八 何が起きたか分からんばい
揺れがなかなかおさまらず
十九 即座に思いうだめばい
ばつと空飛ぶインパルス
二十 江津湖火花でたくさん
明るか笑顔になうたばい
熊本余震が続いてさ 日吉地面が波のよう
被害大きか熊本ばい
トイレできんし流れんし
水に食料店になか
きずな必要熊本に



写真⑨ 配布した熊本地震復興数え歌